様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００３８６

研究課題名（和文）英文学導入教育の理念と方法論の研究

研究課題名（英文）The Introductory Education of English Literature: Its Ideals and Methodologies

研究代表者
利根川　真紀（TONEGAWA, Maki）

法政大学・文学部・教授

研究者番号：４０２９７９９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、あえて英文学にかんする専門的能力より、どの学部の学生でも卒業までに身につけなければならない能力としての「リベラルアーツ的能力」、社会人にとって必要な「社会人基礎力」の養成にフォーカスする英文学教育の理念と方法論を策定し、そのための教材開発をこころみる。リベラルアーツ的能力とは、①言語能力、コミュニケーション能力（日本語・英語を問わず、言葉を論理的・批判的に理解する能力と、論理的・説得的に表現する能力）、②批判的論理能力（文系の場合、言語能力と連動として養成される論理的思考力）、③社会人として必要な文化的教養をたえず更新していくことのできるリサーチ能力――である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
おそらく高校までの国語教育の影響だろうが、文学研究がどのような実践的な意味をもっているかについて懐疑的である学生はいまだに多い。そのなかで実践的な「リベラルアーツ的能力」、社会人にとって必要な「社会人基礎力」の養成にフォーカスする英文学教育の理念と方法論を策定し、そのための教材開発を行った社会的意義は大きかったとわれわれは確信している。複数の教員がひとつの教員組織としてひとつの実践的理念と目的を共有し、それを語る共通の言葉を見つけ、カリキュラムを体系化し、そのなかで教育の内容と方法を議論しあうことは学生の履修動向に実際的な効果をもっていたからである。

研究成果の概要（英文）：This study aims to formulate a philosophy and methodology for teaching English literature that focuses on the cultivation of "liberal arts skills," which are skills that all undergraduate students must acquire before graduation, and "basic skills for working adults," which are necessary for working adults, rather than specialized skills related to English literature, and to develop teaching materials for this purpose. Liberal arts skills include (1) language and communication skills (the ability to understand language logically and critically and to express oneself logically and persuasively, whether in Japanese or English), (2) critical logic skills (in the humanities, logical thinking skills that are developed in conjunction with language skills), and (3) research skills to constantly update cultural knowledges necessary for a member of society.

研究分野：アメリカ文学（とくに小説）

キーワード：英文学教育　理念　方法論　教材作成　リベラルアーツ的能力　社会人基礎力

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究（「英文学導入教育の理念と方法論の研究」）は法政大学文学部英文学科の英文学教育の現状にたいする危機感から生まれたものである。その現状とは、広くいえば世間一般の文学離れを反映した学生の文学離れであり、より具体的には、文学系ゼミを選択する学生と言語学系ゼミを選択する学生の比率が圧倒的な差になっている［た］ということである。１年生のときの基礎ゼミでは文学系の主題（多くはディズニー映画やジブリ映画ではあるが）を選ぶ学生が、言語系の主題を選ぶ学生よりもむしろ多いのに、どうして文学系のゼミを選ぶ学生がこれほどまでに少ないのか。

しかも、以上述べたような英文学教育の現状は、われわれの組織に特有のものではなく、日本全国の英文学科に共通する問題でもあるだろう。だとすれば、その現状にたいして他大学ではどのような組織的対策が講じられているのだろうか。われわれは参考となる組織的体系的な取り組みを探してみたが、残念ながら具体的な事例はほとんど見つけることができなかった。そのような取り組みがまったくなされていないということはありえない。しかし、英文学教育をめぐる厳しい現状にたいしてどのような改善策を講じるべきなのかは、おそらくいまだに個々の教員の努力に任されている部分が多いのだろう。個人ベースで行われてきただけだったからこそ、これまでその教育的効果が客観的あるいは間主観的に検証されることもなく、理念と方法論と教材が一体となった教育システムとして体系化されることも、それが明示的かつ具体的に説明されることもなく、個々人の記憶や記録のなかに断片的な知見や経験として埋もれてしまっているのではないのか。

２．研究の目的

「どうして文学系ゼミを選択しないのか」――その問いにたいする学生の回答の多くは、「文学研究って、何をしていいかわからない」あるいは「文学研究って、何のためになるかわからない」というものである。大多数の学生は、高校までの国語教育によって、文学研究を、論証の必要のない主観的なだけの感想文と、想定された模範解答を予想してありきたりの解釈に終始するレポートとしてイメージしているだけである。そのようなものだけでは文学研究ではないと言われた途端、学生は「何をしていいかわからな」くなるのであり、「何をしていいかわからない」以上、「何のためになるかわからな」くなるのだろう。当然の反応である。

だとしたら、そのような文学研究観に替わる、どのような文学研究のあり方を、どのような言葉で学生に提示できるのか。そしてその文学研究観に基づく文学教育が、大半は社会人として就職していく学生たちにとって、どのような有用性をもつと、どのような言葉で説明することができるのか。そして、その文学研究観に基づく文学教育が現実に学生にとって有用性をもつためには、どのような教材と方法論を用いるべきなのか。

要するに、ディズニー映画やジブリ映画への学生の関心をうけとめながら、学生にとって英文学教育をより有用性をもつものとするためには、そしてそのこともふくめてより魅力的なものとするためには、どのような理念――文学研究・教育とはどのような行為であり、その行為をくりかえすことでどのような社会的有用性をもつのか――と方法論――文学研究・教育が社会的有用性をもつためにはどのような教材を用いて、どのような教授法をとるべきなのか――を、具体的に明示的に提示していくこと、それが本研究の目的だった。

３．研究の方法

以上の目的を達成するためにわれわれが選択した方法は、ひと言でいえば組織化による英文学教育の体系化である。その組織化をひとつの大学の英文学科の文学系という小さな規模（研究代表者および分担者５名＋研究協力者２名）からはじめることにしたのは、同じ危機意識と問題意識、さらに同じ（カリキュラムをふくむ）教育的環境を共有しているメンバーどうしの組織であるほうが、英文学教育を体系化しようとする慣れないこころみにとって都合がいいと感じたからである（しかしこのこころみが他の大学の英文学教員とも共有しうるものだと確信しているので、他の大学の教員と連携することにも興味をもっている）。

そのうえで、年に５回の研究会（モデル授業をふくむ）を開催し、各教員がそれぞれの記憶と記録のなかに埋没している断片的な知見と経験を持ち寄り、それを共有しつつ質問と議論を重ねることによって、英文学教育の共通の理念を定めるとともに、教育の方法論や教材の体系化をめざした。とはいっても体系化の目的は、理念と方法論と教材を画一化することにあったのではない。教育の方法と教材・教育内容においてはもとより、理念においてさえ、多様性を認めあわなければならないのは当然のことである。個々の教員が蓄積してきた教育的努力を集約し体系化していく過程で、それぞれが自分にあった方法論と教材を開発していくことが、なによりも重要な大前提である。

４．研究成果

われわれはまず英文学教育の理念として何を掲げるかというところから議論をはじめた。問題を大きく分ければ、それぞれどのような言葉で学生に伝えるかという問題もふくめ、1) 英文学教育の有用性、2) 英文学研究のおもしろさ、の二点である。

そしてわれわれは、法政大学の英文学科の学生の 95%以上が、一般企業への就職を希望している学生であることに鑑み、そのような学生にとって緊急度がより高いと判断される前者の英

文学教育の有用性について議論をまとめることにした。言い換えれば、英文学にかんする専門的知識より、どの学部の学生でも卒業までに身につけなければならない能力（「学士力」）としての「リベラルアーツ的能力」の養成にかんする検討を優先することにした。リベラルアーツ的能力とは、(1) 言語能力、コミュニケーション能力（日本語・英語を問わず、言葉を論理的・批判的に理解する能力と、論理的・説得的に表現する能力）、(2) 批判的論理能力（文系の場合、言語能力と連動として養成される論理的思考力）、(3) 社会人として必要な文化的教養をたえず更新していくことのできるリサーチ能力――である。

そのうえでわれわれは、「大学は、当該大学及び学部等の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施［中略］を通じて培うことができるよう、［中略］適切な体制を整えるものとする」という文部科学省の省令（平成 22 年 2 月 25 日付）に基づき、英文学教育の有用性を、「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力」――あるいは、経済産業省的な用語における「社会人基礎力」――の養成にあるととらえることにした。

そして「社会人基礎力」の 12 の能力要素のうち、とくに以下の 6 能力――発信力（自分の意見を解かりやすく伝える力）、傾聴力（相手の意見を丁寧に聴く力）、柔軟性（意見の違いや立場の違いを理解する力）、課題発見力（現状を分析し目的や課題を明らかにする力）、創造力（新しい価値を生み出す力）、計画力（課題の解決に向けたプロセスを明らかにし、準備する力）――との関連を考慮しながら、「リベラルアーツ的能力」の養成を、英文学教育の方法論としてどのように具体化していくかを再検討することにした。

いずれの能力もたんなる講義形式の（学生にとっては受動的な）授業では養成されることはない。したがって、講義科目を、演習科目でのプレゼンテーションやディスカッションの実践にとって必要となる専門的知識の効率的提供という観点から再構築することによって、カリキュラムの中心を演習科目に置く教育システムの構築をめざすとともに、演習科目はもちろん講義科目においても、能動的学習（アクティヴ・ラーニング）の要素を拡大することの必要性を確認することにした。

そのうえで、以上のような教育の理念と目的を、基礎ゼミ、二年次演習、文学研究方法論をはじめとする授業はもちろん、オリエンテーション、ガイダンス、ゼミ紹介といったさまざまな機会をとらえて学生に伝える努力を、組織的取り組みとして、いままで以上に積極的に行なった。文学研究をどのような目的のもとでどのようなかたちで進めれば、社会的に有用などのような能力が得られるのかを学生に伝えることからはじめたのである。喜ばしいことに、その成果と思われる学生の動向が着実に数字にあらわれるようになってもいる。

Ｉ　導入科目

英文学科における文学教育の目的が社会的基礎力という実践的能力の養成に有用であることを伝えるために、われわれが重視したのはとくに導入科目（基礎ゼミ、二年次演習、文学研究方法論）である。

A　基礎ゼミ（アカデミック・スキルズとは何かを学習する）

基礎ゼミでは、大学での学習の基礎として、プレゼンテーションの方法と、レポートの書き方を中心に学習する。より具体的には、資料の検索と収集の方法、集めた文献の読み方、データの集め方、主題の決め方、アウトラインの作り方、パワポの作り方、レポートの書き方、アカデミック・ライティングの作法などを学ぶ。その過程で「事実」と「意見・解釈」が性格を異にすること、そしてプレゼンテーションのときも、レポートのときも、「意見・解釈」の提示にはかならず論証（論理的証明）がともなっていなければならないことを学習する。以上があらゆる学問分野に共通する基本的アカデミック・スキルズであることを理解する。

基礎ゼミは 4 つのクラスで展開されるが共通の構成は以下のとおりである。

１）ガイダンス

「大学時代にどのような能力を身につけるか（単位よりも能力を）」を解説
・言語能力（正確に／批判的に理解する力、文法的／論理的に正しく表現する力）
・論理的思考力（論理的に考える力）
・さまざまなものにさまざまな疑問をもち、課題を見つける能力
・自主的に情報を集めるリサーチ力
・集めた情報［エヴィデンス］を分析し、課題を解決し、独創的な理論を創造する能力
・自分なりの個性的意見／解釈を創造し、それを説得的に表現する能力
・個人として人を惹きつける魅力を身につける

２）自己紹介

(1) 自分は何者かを考える
(2) 自分を印象的に紹介するための言葉を考える
(3) PowerPoint にまとめる（「PowerPoint で発表資料を作ろう」）
(4) プレゼンを聴いて、的確な質問を考える

３）リサーチ
(1)主題（自分が興味をもっていること、自分が訴えたいこと）を決める
(2) 資料を調査する（インターネット、図書館）
(3) 調査した資料を収集する
(4) 収集した資料を批判的に読み、ノートを作る
(5) とくに重要な資料は、要約を作っておく

４）口頭発表とレポート
(1) 箇条書き的なアウトラインを作る（ＫＪ法）
(2) アウトラインをパワポ資料に転換する
(3) アウトラインにそって話す内容を決め、プレゼンをする（原稿はつくらず、パワポ資料を見ながらプレゼン）
(4) プレゼンした内容をパラグラフ・ライティングの作法にのっとって文章に転換し、アカデミック・ライティングの作法にのっとってレポートを作成する

Ｂ　二年次演習（アカデミック・スキルズを文学研究に応用）
　二年次演習（文学系）では、具体的にひとつないし複数の文学作品（映画もふくむ）を教材とし、プレゼンテーションとレポート作成の実践をとおして、基礎ゼミで学習した基本的アカデミック・スキルズ、とくに論証の方法とアカデミック・ライティングの作法をより具体的に学習する。

(1) 重要箇所（解釈の妥当性を論証するときのエヴィデンスとなりそうな箇所）をノートしながら文学作品を読む（文献の読み方、データの集め方）
(2) 自分なりの主題を決め、それにそってその作品にかんする自分の解釈を作りあげる（主題の決め方、アウトラインの作り方）
(3) いくつかの重要箇所の分析をエヴィデンスとして重ねながら、自分の解釈の妥当性を論理的に証明する（論証の方法）
(4) 必要に応じて先行研究や関連文献をリサーチし、その結果を用いて自分の論証を補強する（データの集め方、論証の方法）
(5) 論証の過程とともに自分の解釈を、プレゼンテーションやレポートというかたちで、過不足のないわかりやすい言葉と論理で言語化する。それをとおして、パラグラフ・ライティングをふくむアカデミック・ライティングの作法を具体的に学習する（アカデミック・ライティングの作法）

　基礎ゼミと二年次演習というふたつの導入科目の授業をとおして筆者が感じたのは、入学後できるだけ早期に、(a)「（エヴィデンスとなりうる）データの収集→収集されたデータの分析→理論／解釈の創出→理論／解釈の妥当性の論証」というあらゆる学問分野に共通する基本的なアカデミック・プロセスの重要性を理解させること、そのうえで、(b) 国語教育で根強く植えつけられた「文学研究＝感想文」という先入観を脱却させ、文学研究も基本的なアカデミック・プロセスを有するふつうの学問であることを認識させること、(c) その基本的アカデミック・プロセスの反復的訓練が、リベラルアーツ的能力／社会人基礎力を身につける唯一の方法であることを確信させること――の必要性である。

Ｃ　文学研究方法論
　文学研究方法論は一年次から履修できる英米文学・文化研究への入門として、文学研究の基本概念、方法論、批評理論について学習する授業であるが、その目的は、①文学を学ぶことは何がどうおもしろいのか、②文学を学ぶことは将来何の役に立つのか、③文学を学ぶことは英語力の向上にどう繋がるのか、④文学を研究する方法にはどのようなものがあり、具体的にどのようなプロセスで進めていくものなのか――という 4 つの問いを念頭に置いて、文学研究の意義と方法を、解釈の実践を通じて体験的に学ぶということにある。
　基本的には講義形式で進めるが、ほぼ毎週ワークシートが配布され、学生にはそこで出される問いへの自分の意見や読み方を記述するかたちで、講義へのレスポンスや作品解釈を行ってもらい、翌週の授業で適宜教員からのフィードバックがなされる――というかたちで、履修者が多いにもかかわらず、アクティヴ・ラーニングの要素を多くふくんでいるのが特徴である。そのため題材は、小説と映画を中心に、演劇、漫画、テレビアニメ、グラフィック・ノヴェル、音楽、などできるだけさまざまなものを用いることで、能動的学習（アクティヴ・ラーニング）への意欲を高める工夫がされている。

　最後に、導入科目以外の講義科目と演習科目の位置づけについても簡単に記しておく。

Ⅱ　講義科目

先述したように、われわれは講義科目の内容を、演習科目でのプレゼンテーションやディスカッションの実践にとって必要となる専門的知識の効率的提供という観点から再構築すべきであると考えた。と同時に、アクティヴ・ラーニングの要素を拡大する必要についても確認した。当然のことながら、たとえば文学史などの授業においては、アクティヴ・ラーニングの要素を拡大するためには授業内容をカットする必要が生じる可能性があるだろう。授業内容の量を優先するとすれば、アクティヴ・ラーニングの要素をカットしなければならないのかもしれない。しかし、これをかならずしもジレンマとはとらえず、講義がたんに演習科目でのプレゼンテーションやディスカッションの実践のための知識の効率的提供だけではなく、それ自体がアクティヴ・ラーニングの要素をもつための（教員の負担が過度にならない）さまざまな実践的工夫を議論していく必要があるだろう。

Ⅲ　演習科目

法政大学文学部英文学科では、原則、三年生からひとつのゼミに所属し、英米文学演習を受講することによって卒業論文の準備をはじめることになっている。英米文学演習とは、講義科目で身につけてきた文学史的・批評理論的知識を背景として、導入科目をつうじて身につけてきた作品解釈のプロセス――①作品から自分なりの／独創的な意味を創出し、②その解釈の妥当性を（エヴィデンスをあげながら）論証するとともに、③その論証の補強のために、作品（テクスト）と（解釈のための）コンテクストをリサーチする――を、プレゼンテーションやディスカッションやレポートというかたちでくりかえし実践し、さまざまなリベラルアーツ的能力をさらに向上させるための場である。

本研究をとおして、リベラルアーツ的能力を評価するためのルーブリックも作成されており、教員はそれにそって学生のレポートを評価し、学生はそれによって自分の能力の劣っている部分を自覚できるようになっている。評価の項目は以下のとおりである。

1) 独創性（originality）：　自分なりの主題を選択し、その主題について独創的な解釈を提示することができているか
2) 論証（evidence）：　作品から適切な箇所を選択し、それを証拠として挙げながら、自分の解釈の妥当性を証明することができているか
3) リサーチ（research）：　自分の解釈と関連する先行の批評や背景となる資料を参照し、それで自分の解釈を補強することができているか
4) 提示／表現（presentation/expression）：　自分の解釈を適切な言葉・文法・形式で表現することができているか
5) 提示／構造（presentation/structure）：　文と文、段落と段落、節と節、章と章が論理的階層的に構造化されているか
6) 引用（quotation）：　引用箇所は適切に明示され、出典は適切に明記されているか、文献一覧は適切に記載されているか（引用の仕方、書誌情報の記述の方法については、MLA 第 8 版にもとづき、「英文学科文学系レポート・論文用書式」を作成し、共通の指導を行っている）

最後に

以上、本研究の成果を要約的に記述したつもりであるが、そのうえでふたつのことを強く感じている。ひとつは、（教育一般について言えることだろうが）文学教育の内容や方法は教員の個人的資質によって異なるのが当然であるということである。そしてもうひとつは、複数の教員がひとつの教員組織としてひとつの理念と目的を共有し、それを語る共通の言葉を見つけ、カリキュラムを体系化し、そのなかで教育の内容と方法を議論しあうことは学生にたいして実際的な効果をもちうるということである。

最後にこれからの課題を述べておきたい。われわれはこの 4 年間、英文学研究の社会的な有用性を主題として共同研究を行ってきたが、英文学研究は、たんに有用性によって根拠づけられるだけで十分ではないことは自明だろう。それに加えて、学生にたいして、英文学研究のどこがおもしろいかも言語化してみせる必要があるのではないだろうか。すなわち、文学研究のおもしろさを理論的に定義し、そしてそのおもしろさを学生に体感させる方法論と教材を研究する必要もあるのではないか。

現代の文学批評は文学研究のおもしろさを、作品自体のおもしろさにではなく、独創的な解釈の創造に見いだす立場に立っている。読者は文学作品から自分なりの解釈をつくりあげていくことが許されている、という独創的な解釈を創造することの興奮が、文学研究の真のおもしろさであるという立場に立っている。それを、英文学教育の有用性にかかわる＜教育的＞理念とは異なる、英文学教育の＜創造的＞理念と呼ぶとすれば、その理念のもとで独創的な解釈を創造することをどのように教えることができるのか。

解釈が独創的であればあるほど、説得力のある妥当性の論証が求められることになる。したがって、英文学教育の＜創造的＞理念はその＜教育的＞理念と表裏一体のものなのである。そのふたつの理念を相互に連動させることが魅力的な英文学教育をつくるのではないか。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計15件（うち査読付論文　10件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 利根川真紀	４．巻 18号
２．論文標題 「CapoteのBreakfast at Tiffany'sにおける南部表象――映画を補助線として」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『言語と文化』（法政大学言語文化センター）	６．最初と最後の頁 37ー53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 丹治愛	４．巻 63号
２．論文標題 「英文学導入教育の理念と方法論の研究――個人的総括」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『英文學誌』（法政大学英文学会）	６．最初と最後の頁 15-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 丹治愛	４．巻 63号
２．論文標題 「『ドラキュラ』と『ノスフェラトゥ』における伝染病と人種――細菌学的ディスコースの隠喩性と政治性」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『英文學誌』（法政大学英文学会）	６．最初と最後の頁 65-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮川雅	４．巻 63号
２．論文標題 「「ベレナイシィ」とポーと男女の病――三分説の視点からの覚書」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『英文學誌』（法政大学英文学会）	６．最初と最後の頁 97-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小島尚人	4．巻 63号
2．論文標題 「"My Beth"――Little Womenにおけるベスの病とジョーのキャリア」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『英文學誌』（法政大学英文学会）	6．最初と最後の頁 43-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 利根川真紀.	4．巻 17号
2．論文標題 「"The little girl looking for her mother"――トニ・モリスンの「レシタティフ」と『神よ、あの子を守りたまえ』における娘たちの友情」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『言語と文化』（法政大学言語文化センター）.	6．最初と最後の頁 61-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 丹治　愛	4．巻 10号
2．論文標題 「『嵐が丘』と田園主義的イングリッシュネス　崇高な風景とヨーマンの記憶」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『英文学研究　支部統合号』（日本英文学会）	6．最初と最後の頁 7-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Yamazaki, Akiko	4．巻 1
2．論文標題 "31. A Remedy, or, the Meaning of the Goon's Small Head. Butler, Catherine, and Farah Mendlesohn"	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Diana Wynne Jones: Bristol 2019, Stoke-on-Trent: Manifold Press	6．最初と最後の頁 144-147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山崎暁子	4．巻 62号
2．論文標題 「アダプテーションと経済性――小説 Howl's Moving Castle の場合」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『英文學誌』	6．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小島尚人	4．巻 62号
2．論文標題 「Transbellum とは何か、あるいは作者の不死について――アメリカ文学研究のTemporal Turnとその帰結」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『英文學誌』	6．最初と最後の頁 15-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 利根川真紀	4．巻 16
2．論文標題 「『目覚め』におけるエドナの不在の母をめぐって――<海><草原><音楽> を手がかりに」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『言語と文化』（法政大学言語文化センター）	6．最初と最後の頁 31―47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 利根川真紀	4．巻 55
2．論文標題 「”Oh, Sophronia, it’s you I want back always”――ヘルマンにおける黒人乳母表象」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『アメリカ文学研究』（日本アメリカ文学会）	6．最初と最後の頁 37-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 利根川真紀	4．巻 10
2．論文標題 「ピアノ演奏の先にあるもの――『目覚め』と『黄金の林檎』」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『すばる』	6．最初と最後の頁 156-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 利根川真紀	4．巻 19
2．論文標題 「ウェルティの『黄金の林檎』におけるマクレイン屋敷の設定――短編から連作短編集へ」	5．発行年 2022年
3．雑誌名 『言語と文化』（法政大学言語文化センター）	6．最初と最後の頁 71-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 丹治　愛	4．巻 98
2．論文標題 「カズオ・イシグロ『日の名残り』（二）　ヘリテージ文化の影のもとで」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『人文研紀要』（中央大学人文科学研究所）	6．最初と最後の頁 59-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 Yamazaki, Akiko
2．発表標題 A remedy against the corruption of power, or the meaning of the Goon's small head
3．学会等名 Diana Wynne Jones Conference (Bristol)（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Yamazaki, Akiko
２．発表標題 The Meanings of Silence in The Other Side of Silence
３．学会等名 IRSCL Congress (Stockholm)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 丹治　愛
２．発表標題 『嵐が丘』とイングリッシュネス
３．学会等名 日本英文学会第90回全国大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 丹治　愛
２．発表標題 カズオ・イシグロ『日の名残り』（1989）とその映画化（1993）
３．学会等名 日本英文学会北海道支部第66回大会（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計4件

１．著者名 宮川雅、竹内理矢、山本洋平ほか58名	４．発行年 2021年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 256
３．書名 『深まりゆくアメリカ文学』	

1．著者名 高橋和久、丹治愛（共編著）	4．発行年 2020年
2．出版社 松柏社	5．総ページ数 515
3．書名 『二〇世紀「英国」小説の展開』	

1．著者名 篠崎実、新井潤美、宮丸裕二、松本朗、福西由美子、秋山嘉、丹治愛、安藤和弘	4．発行年 2019年
2．出版社 中央大学出版部	5．総ページ数 243
3．書名 『英文学と映画』	

1．著者名 宮本文・桐山大介・小島尚人・千代田夏夫・ハーン小路恭子	4．発行年 2021年
2．出版社 松柏社	5．総ページ数 142
3．書名 Literature Ideas You Really Need to Know: From "Mimesis" to "Sexual Politics"／文学概念入門：〈ミメーシス〉から〈セクシュアル・ポリティクス〉まで	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	山崎　暁子 (YAMAZAKI Akiko) (00348301)	法政大学・文学部・教授 (32675)	
研究分担者	宮川　雅 (MIYAKAWA Tadashi) (60209864)	法政大学・文学部・教授 (32675)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	小島　尚人 (KOJIMA Naoto) (60781169)	法政大学・文学部・講師 (32675)	
研究分担者	丹治　愛 (TANJI Ai) (90133686)	法政大学・文学部・教授 (32675)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関